PREX NOW

PREX
Pacific Resource Exchange Center

途上国と関西をつなぐ　VOL.256

特集：働く悩みは世界共通

働く悩みは世界共通。

株式会社 西當照明を訪問した
タンザニアのムヘヘさん

領家流
仕事術。

「日本で学んだことを活かそうとしても、
上司や同僚の理解を得られない・・」
「問題点を変えたいと思っても、そんなに働いてどうするの？
と言われてしまう ・・」
PREXの帰国研修員から寄せられた「働く悩み」について、
大阪府庁の領家誠氏にアドバイスをいただきました。
（国際交流部 奥村）

■行政組織に勤務していますが、頑張って働いても組織から評価されません。そんなに働いてどうするの？と言われます。日本の人はどのように働くモチベーションを維持しているのでしょうか？（バングラデシュ研修員）

大阪府庁 領家 誠氏：役所の仕事は世の中のために直接何かできる仕事。恵まれた職です。人の役に立つということに対して、本来モチベーションが低いわけがありません。しかし、以前、大阪府庁でモチベーションに関するアンケート調査が実施されたとき、一番高かったのはケースワーカーや保健師などの保健・医療・福祉の専門職で、一般行政職は一番低いという結果がありました。それは、自分の担当している仕事や政策が人のためになっているという実感がないからだと思います。
私自身は、40歳を過ぎたら関わる仕事はすべてライフワークにしようと思っていました。業務上の相手でも縁があればずっと関わり続けるつもりでいます。役所に私みたいな人がいる、ということが、困ったときの相談場所としてお守り代わりになっているようで、様々な企業から相談を受けます。頼ってもらえるのは公務員としてありがたいことです。人の役に立つことが楽しくて仕事をしています。
評価という点では、上司との関係を良くするための努力はしています。なぜならば、上司との関係が悪ければ、私の部下たちにもその関係性が及ぶことがあるからです。例えば、上司が私に反対ならば、部下の仕事も反対されるといったことです。議論は別にして、上司と喧嘩をすることも厭わないというタイプの人もいると思いますが、私はそうではありません。かといって、上司にゴマをするとかではなく、立ち位置としては、上司が困った時に使える利用価値のある部下であろうと心掛けています。そういう意味では、上司はもちろん、同僚ともですが、「何を考え、重視しているのか」という価値観を把握するための日頃のコミュニケーションが大切だと思います。

■従業員のクリエイティビティを伸ばすためには、どうしたらいいでしょうか？（ウクライナ研修員）

領家氏：大阪府の行政の仕事の場合になりますが、クリエイティビティは、①課題を発見する力 ②課題を解決するためのアイデアを生み出す力 ③実行するため組織内外への訴求力とヒト・モノ・カネの動員力、この３つが合わさったものだと思います。これを身につけるためには、ともかく、経験、つまり場数を踏むしかありません。経験は、自らするのはもちろんですが、他人や書籍・レポートからも得ることができます。

JICAドンナイ省ものづくり人材育成事業

領家
誠 氏

（大阪府庁）
「地方公務員アワード2018」受賞
ものづくり支援拠点MOBIOをオープンさせ、
年間100回を超えるものづくり企業の交流の場
MOBIO-Cafeを主宰した。

もっとも簡単な取組みは、「カイゼン」です。カイゼンでは、対象となる課題を見つけ、課題を解決すためのアイデア出しをし、改善事項をルールとして定着させるというクリエイティビティを伸ばすための要素が詰まっています。身の回りの職場環境や社内の特定の商品やサービスについて、具体的なテーマでカイゼンに取り組むことをお勧めします。より多くの外部の人と出会う機会を作る、組織内外で勉強会・研究会などを作ることも有効だと思います。ただ、全員がクリエイティブである必要はありませんし、そもそも、そんな事はあり得ないのではないでしょうか。結局のところは、役割分担と適材適所が大事です。この人は何が得意なのかを把握して、業務の中で、何であれば、任せることができるのかを考え、それを頼むようにします。
また、新しい活動を始める時、変化を嫌がって反対意見ばかり言う人、動かない人もいると思います。反対意見には、良い意見とそうでない意見があります。建設的な反対意見は聞くようにしています。一方で、何を言っても反対する人がいます。その人が反対する理由がわかればいいのですが、新しい仕事は業務量増になるので、最初からできないと決めつけている人や私のことを気に入らないという人は、どこまで行っても、説得は不可能です。なので、スルーするしかありません。まずは、仲間を見つけ、やれることからやって実績を出してから説明する。これの繰り返しで、少なくとも、反対はしないというところまで持っていくようにしています。

■起業家から相談を受けても、対応に時間がかかり、その結果、信用を失ってしまいます。（エクアドル研修員）

領家氏：誘致した企業（投資家）と地元の起業家とのマッチングに時間がかかるのは、日本でも同じです。どうすれば、市民の期待に応えることができるか？という点ですが、私も、最初に企業に対する直接支援を始めたとき、なんの実績も信頼もなく、「ほぼ、何もできない」からのスタートでした。実は、今も、企業が抱える経営課題は多様で、私も含め一人の支援者が解決できることは多くないと感じています。これまでしてきたことは、経営計画、資金調達（投資家探索）、ビジネスマッチング、技術支援、海外展開支援、デザインなどの専門家や支援機関の紹介、最終的には「人の紹介」が8割と言っていいくらいです。日常的に、こうした支援者の発掘を行い、一方で、企業と会いながら課題を顕在化させる。そして繋ぐ。こうしたことの繰り返しを数多く行うことで、少しずつ信頼を得ることができたと思います。市民の期待は多様でレベルも様々だと思います。公的機関の部署によって、応えることのできる役割やレベルもまた、様々だと思います。業務としては答えが出せない場合でも、起業家の課題に寄り添い、他のリソースを紹介するなど応援することはできると思います。

フランスで開催されたビジネスプランコンテストでは
国際賞を受賞しました。（2010年）

シリアの企業家であるイマード・ハイダールさんの紹介記事です（3回シリーズの1回目です）。研修に参加する皆さんも私たちと同じように、自分の国で成功や幸せを目指して日々を送っています。その一人一人に人生のストーリーがあり、研修への参加はその一場面です。世界各地でどんな人がどんな人生を送って、研修に参加されているのかを知っていただけたらと考えながら、記事をまとめました。
国際交流部 瀬戸口

シリアで会社を経営しているハイダールです。
大学を卒業した1999年、シリアの工業首都アレッポは織物生産で活況でしたが、カラフルな糸は輸入に依存していたため、その糸の生産はビジネスになると考えました。シリア初の完全コンピューター化された機械を輸入し、従業員6名の会社Yamam, fancy yarns & Tuftsを創業しました。しばらくは順調でしたが、従業員が30人に増え経営の難しさを感じ始めた2007年、アレッポ商工会議所を通じてシリアで奇跡的な成果を出していた日本人シニアボランティアの皆さんと出会いました。
新しい考え方を知り、見えなかった問題に気づき、日本的な経営も学びました。良し悪しでなく現状を正しく認識して目標を設定し、それを達成するため現状と目標のギャップを乗り越える。このアプローチがいかに単純明快であるか、自分のビジョンがどれほど曖昧だったかに気づきました。
その後2009年の日本での研修に推薦されたことは、まさに私の人生を変えることになりました。<次号へ続く>

ナイジェリアのラゴス商工会議所のヘンリーさん（左）と中小企業専門の支援機関SMEDENで働いているレジーナさん（右）。所属先は違えど、二人とも、担当企業の抱える問題解決に強い思いで取り組んでいます。自分の努力に対して上司から思った評価がもらえず、やきもきすることも多くあるようです。
3回にわたって彼らの仕事をお伝えします。
国際交流部 前田（智）

ラゴス商工会議所のヘンリーです。
会員企業の問題解決、新会員探し、セミナー開催が私の主な仕事です。24時間体制で企業を支援し、すべての職員が高いモチベーションをもって働いています。中小企業向けのセミナーや個別面談等、精力的に活動しているつもりですが、その努力に反して、上司からは、自分が思ったように評価されていないのが現状です。部下には監督者から与えられた仕事や目標に対して、全力で仕事をするよういつも励ましています。
中小企業専門の支援機関で働くレジーナです。
この仕事は、たくさんの起業家の方に会うことができ、微力ながら私の知識で彼らの問題解決に尽力できることにとてもやりがいを感じています。部下に対しては、いつも最大限の成果をだしてもらえるよう、一緒に挑戦し、失敗し、成功するというプロセスを繰り返し、高いモチベーションをもって働ける環境を作ることを意識しています。「いい仕事をしたければ、恥ずかしがらずにマネから入ってもいいじゃないか！」これが私のモットーです。
<次号へ続く>

ピンチをチャンスに！照明器具の特注品の製造技術が捕虫器「トレテーラ」に。

JICA中小企業振興のための経営強化（金融アクセス）研修に参加したアルバニア、ミャンマー、ナイジェリア、スーダン、タンザニア、ベトナム、ザンビアの研修員と。

2012年はどん底で、「俺ら、どうする？」という状況でした。

東大阪市にある株式会社 西當照明 代表取締役 西當和久です。うちは、東大阪の社員7名の本当に小さな会社。私は、経営者としての資質があるわけではなく、営業も苦手ですし、降りかかった火の粉を振り払うのに右往左往してきただけ。研修員の皆さんに何をお伝えできるのかと思うのですが、自社製品捕虫器「トレテーラ」を海外の方に知ってもらう機会であり、日頃、社員に「海外へ行くぞ」と話していることが「夢じゃないんだ」と思ってもらえて、とてもうれしく思っています。

私は大学を出て、別の会社で営業をしていました。義父が創業したこの金属加工の会社に来て、一から技術を身につけ12年目で社長になりました。義父に鍛えられ、この時の苦労は、その後に押し寄せてくる失敗や困難のたびに「このまま終わりたくない」というエネルギーの源になっています。それぐらい厳しい人でした。弊社は、照明器具の特注品メーカーで日本の高度経済成長を背景に業績を伸ばしてきました。ところが、2012年には、LEDなどの高効率な照明の普及により同社で70%を占めていた仕事がゼロになりました。とことんどん底で「俺ら、どうする？」という状況でした。

そんな中、近隣の農地で虫が大量発生。これまで培ってきた照明器具の生産の応用で、捕虫器を開発してみることとなりました。ベテラン社員も、若手社員も一丸になり、失敗をしながら製品化しました。売り込みの電話をかけるのも、展示会に出展するのもドキドキしながら挑戦の連続。苦労を知っている社員は、「自分でやらなければいけない」と考えて勉強し、動いてくれています。

●タンザニア　ムヘヘ さんの声（財務企画省 政策研究部門 財務管理責任者、表紙）

創造性とそこで働く人々の精神を学んだ。何度も補助金を得ることに失敗しても、彼らがあきらめなかったことは、私たちが「目指すべきだと信じていること」そのものだった。この企業が成功した経験は、社会全体にとって重要なことだ。タンザニアの零細企業、また所属組織に伝えたい。

失敗や困難を乗り越え、新しい製品や新しいビジネスのアイデアを得る過程はどの国の研修員にも大変参考になっている。

自分の国でも必需品！捕虫器と研修員。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」です

8 働きがいも経済成長も

9 産業と技術革新の基盤をつくろう

おもてなしから学びました。

日本旅館の「おもてなし」体験、浴衣で日本海の幸に舌鼓。城崎温泉「お宿芹」にて。右がマルさん。

フィリピンのマルです。観光を通してフィリピンのために働きたい。

「JICA持続可能な観光地域づくりのための人材育成　日本のおもてなし研修」に参加したフィリピン・パンガシナン州政府のマルです。
研修中に、夜の大阪を散策していて、道に迷ってしまいました。たまたま出会った若い家族は、どう行くのか教えてくれただけでなく、駅まで連れて行ってくれました。祇園のレストランで働く若者は、何も買っていないのにお手洗いを使わせてくれました。こんな小さな出来事から、日本には、人々の中に「おもてなし精神」が息づいていることを感じました。それは「サービス」という言葉を超えるものだと思いました。
「おもてなし」は日本に限ったものではなく、世界中の人に共通するものだと信じたいです。それは国籍などとは無関係の「仲間への思いやり、やさしさ、相手を敬う気持ち」です。もしかすると人間が忘れてしまった「心」かもしれません。
「自分」は他の人々との間の中に見出せます。「観光」は世界中の人々がつながる道を整えます。人は国の最も大切な観光資源、財産であり、観光業は人に基づいた産業です。日本での研修は、共に学び、体験をし、それぞれのアイデンティティや文化を認め合う「一生に一度の機会」だったと思います。
日本の「おもてなし」から学んだすべてのことを活かし、観光を通して自分の国のために働くことで、日本で学ばせてもらったことに恩返ししたいと思います。
（フィリピン パンガシナン州政府 マルさん）

飛鳥の民家ステイ先の方と。

初めての茶道体験。自分でもお茶を点てました。

見て触れて学びました。

民家ステイ先「徳星醤油醸造場」の皆様と。左端が福田さん。

体験がミライを創る！大和飛鳥ニューツーリズムの福田です。

奈良県明日香村は歴史的風土を保存・整備するために村全体が法律で守られています。そんな開発制限がある暮らしの中で、今あるものを生かした取組みが体験型教育旅行「民家ステイ」です。民家ステイには地域活性化と体験する学生の生きる力を育むという2つの目的があります。
実際に研修員の方々にこちらを体験していただきましたが、体験後のとても楽しかったとキラキラした皆さんの表情が印象的でした。研修員の皆さんとホストファミリーの交流を通して、国や立場は違っても民家ステイの理念や大切にしていることが伝わっていると感じ胸が熱くなりました。
研修2日目は稲渕の棚田へご案内し、景観を守るための取組みなどを見ていただきましたが、皆さんの一番の関心ごとは「獣害対策と灌漑について」でした。どの国でも悩み事は一緒なのだなと面白かったです。
今回の体験を通じて感じたことを国のミライ創りに活かしていただけたら嬉しく思います。
（福田史織 一般社団法人大和飛鳥ニューツーリズム
＊現在は、飛鳥観光協会）

緑が映える稲渕の棚田で梅ジュースを一杯。

涙、なみだの離村式。

いつまでも手を振って名残を惜しみます。

NEWS &TOPICS

今回の特集は、PREXが一人の帰国研修員から職場での悩みの相談を受け、大阪府の領家様にアドバイスをいただいたことからスタートしました。日本の読者の皆様にとっても、「働く悩み」のヒントになれば幸いです。
読者の皆様のご経験や、感想もぜひお聞かせください。お待ちしています。
E-mail: prexhrd-pr@prex-hrd.or.jp

TICAD7 公式サイドイベントにブース出展！

8月27～30日にパシフィコ横浜で開かれたTICAD7（第7回アフリカ開発会議）の公式サイドイベントにブース出展し、アフリカ各国より参加の政府要人、行政官にPREXの活動をPRしました。
なお、これまでPREXの研修には、アフリカの48カ国から668人が参加しています。
（国際交流部　広瀬、前田（智）、小林）

ブースには、ガーナ投資促進センターやカメルーン森林保全団体の幹部の方々が訪問しました。

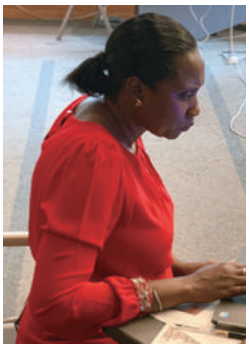
ビンフォック省と吉野町

8月23日～25日、奈良県吉野町の依頼を受けて、ベトナムビンフォック省教職短期大学にて3S・安全に関する講習を実施しました。参加者は木工企業の管理者、ワーカーリーダーで、19名です。
同省は、木工加工を地域の基幹産業へ育成することをめざしています。奈良県の吉野町は木工加工産業が盛んであり、ビンフォックの木工加工産業の人材育成に協力しています。
PREXが関わってきたドンナイ省のプロジェクトを卒業された方が講師を務め、参加者との対話や実習も含めたすばらしい講義をしてくださいました。参加者の方も熱心に受講していました。
（国際交流部　明路、小林）

カザフスタン ヌルスルタンを訪問～福井県立大学アンドレイ・ベロフ教授より～

PREXの帰国研修員が所属していた「カザフスタン産業開発機構（KIDI）」の招待で、アルマトィの首都ヌルスルタンを訪問しました。現地で開催された国際会議で「生産性」について報告することが目的でした。6月とはいえ、カザフスタンの夏は暑く、公園のプールで泳ぐことも可能なほどでした。今回訪れたカザフスタンの首都はこれまで「アスタナ」と呼ばれていましたが、今年3月に「ヌルスルタン」と改称されました。「ヌルスルタン」とはカザフスタンの初代大統領ナザルバエフ氏のファーストネームで、長年の功績をたたえてその名前を首都につけたそうです。このヌルスルタンは、シベリアの厳しい環境の大地の真ん中に100万人都市として建設された、大変ユニークな都市です。
（写真上：福井県立大学アンドレイ・ベロフ教授とPREX帰国研修員のグルミラさん　中・下：街の風景）

おしゃれなアワさんfromガンビア



アフリカからの研修員は、皆さんとてもおしゃれです。左は、毎日、素敵な衣装で研修に参加してくれていたガンビア投資促進庁のアワさん。JICA投資促進のためのキャパシティ・ディベロップメント（A）研修の参加者です。

PREX NOW第256号（2019年10月発行）
編集・発行：公益財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事・事務局長：岡本　譲
〒543-0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6
大阪国際交流センター2階　TEL.06-6779-2850
ホームページ：http://www.prex-hrd.or.jp
E-mail:prexhrd-pr@prex-hrd.or.jp
企画制作：ユナイテッド・トゥモロー